

三田久學

六月



す

大正十五年四月二十四日第三種郵便物認可(毎月一回日発行)昭和十七年五月二十日印刷納本 昭和十七年五月二十日発行 第十七卷 第六號

人形物語

(と)

吉田榮三に聴く

花柳章太郎

藝だこ

私は昨年春「浪花女」を上演するに當つて、前年の暮、大阪へ出勤して居たのを機に、伊志井寛君にたのんで、津太夫さんと文五郎さんとに逢はして貰つたことがある。

それは、昔し、團平、おちか、越路太夫などに就いて、その當時の風俗や、又それ等の人達の性格や癖などに就いて聽いて置きたかつた爲であつた。

團平、おちか、住太夫、植村（文樂座の仲打）、越路と云ふやうな主要人物の話をして貰つた時、それ等の名人の、並々ならぬ修業に、實際心から敬意を表したのだつた。

その修業、苦難何十年のかたまりと云つていゝ津太夫さんの咽喉の下に、大きなシヨリの出来て居るのに驚いた。丁度、五分程の丸いブヨ／＼したタコが出来て居る。それを見せた津太夫さんは、私にそれに觸つて見ろと云ふのだ。私はそのタコに觸れると、津太夫さんがウツト云つて腹に力を入れて、丁度三味線の彈出しが始まつて語り出す前の送りになる構えである。すると、そのブヨ／＼したシヨリが少し縮まる

と、とても堅くなつてしまふ。つまり咽喉に力を入れるその筋肉張がそのシヨリを固める譯である。

それと文五郎さんの左手の右手よりはるかに大きく、そしてその親指、人差指、中指、その關節の太さに驚いた。そしてそれと反對に親指と人差指の指頭の肉がフニヤ／＼になつて居ることだ。

それに掌の堅いことも通常の人と比べて吃驚する。掌の堅いのは人形の胴串を握る爲、指の關節の太いのはその胴串をさゝえる爲、指頭の肉のフニヤ／＼なのは肩、眼、口の線を操つるためにさうなつたのである。

兩氏とも何十年間（共に五六十年）の「藝だこ」である。

それを忘れないよう半紙にその手形をつけて寫し、それにその太くなつた處へタコの理由をくはしく書きとめて置いたものが私の處に秘藏してある。

この二人の藝術家の修練の結晶とも云ふべきものに觸れて、私はしみ／＼頭の下る思ひであつた。

變な話だが、魚にもそんな話がある。大阪でよくものを喰べても、鯛などを大洋から入つて來たもの、そして鳴戸を越

「さアお這入りやす。昨日は大きに失禮いたしました。さ。」

えて来たものは骨に節が出来て身がしまつて居てうまい。つまり荒浪やあの渦をくぐつて来たものには、それ丈體に苦勞の味がつくことになる譯だ。

それもすでに津大夫さんの昨春の逝去によつて、もうそのシコロには觸れられないのである。あの悪聲であれ迄の淨瑠璃を語つた紋下津大夫の藝術には接しられないのだ。

榮三、文五郎兩師健在の間に聴くべきことは充分聴き、學ぶべきものはよく教へて貰つて置かなければ、この國寶的存在の名人は今後出現しないのだ。

それで私は毎朝、八時に起きて巽さんへ行き、そして九時頃きのふ見知りの榮三師の表札、柳本榮次郎とある鰻谷東之町十八番地の家の前を通つた。

あさぎの麻のれんのかゝつた、小さい家、二階は屋根の修繕らしく、明け開かれ、のぼりの古いのに包まれた何んだか人形らしいものが見えて居る。

私が家の中の様子をうかゞつて居ると、丁度、その私の足が見えたのか、浴衣姿の榮三師がのれんから外を覗いたのと一緒になつて、思はず二人とも「ハ………」と笑つてしまつた。

つまりきのふの約束通り来るかなと云ふ氣持ちと、又私の方はをじさん、家に居るかなと云ふ心が、ピタリと合つたのだ。

「さアお這入りやす。昨日は大きに失禮いたしました。さ、どうぞ敷いとくれやす。」

きのふの初對面のやゝ堅苦しきに引きかへて、今日は浴衣の煙草盆を前に丁度朝飯の濟んだところと見え、啣え揚子の好々爺である。

「今日から寺入です。いろ／＼の事伺つてノートに書きます。その代り貧しい話ですが、私の方にもいろ／＼の苦心がありますからお話します。」

私が蒲團を敷かないと見えてお爺さんも啣え揚子を捨て、形を改め、

「さア敷いとくれやす。さうせんと話が堅うなりますさかい。きのふはお客はんを忘れて夢中でお話したりして、六角はんに濟まんことだつした。」

「今日電話が六角さんからありまして、貴方がたのお話を聴いて居たら、年中上げ下げの相場にかゝつて居ることが阿呆らしゆうなつた。と云つてました。全く金錢を離れたあゝしたお話は得難いもので、六角さんは今日なんだか店に居ても、仕事して居て變だと云つて居られました。が、あゝした芝居に興味を持つて居る人が、我々の話を聴いて居られたら、金錢をはなれて居る丈に、さうした氣持ちになるのかも知れません。驚いたのは店員諸君でせう。月給袋金庫の鍵を持つて居る人が、三時間も四時間も居なくなつたのですか

ら……」

榮三師は吃驚したらしく、

「エ、そんなら六角はんそれ渡さんとつる市へ来やはつたのだつか。そらお店の人はたまりまへんわ。あの方は藝の話がよつぽどお好きでんな。六角はんが以前云ふてはりました。貴方と話しさしたらうまが合うやろと。」

私が榮三師に會ひたい希望は三四年以來で、丁度昨年私が晴小袖を撮影のため京都へ行つてた時、溝口君が浪花女を特作プロで撮つて居て、今日いよ／＼吉野山の舞臺を撮影するから觀に来てくれと云ふ使ひを新興へよこして呉れたので、丁度その日、私の方の撮影が早く済んだため、私が訪ねたことがある。

道行の場面でその文樂の舞臺の見事さ、その當時の本式の舞臺で榮三師と文五郎さんとで實演するその撮影を、四五時間溝口君に付合つて見て居たことがあつた。

二度程テストした後、休みの間に私は紋十郎氏の紹介で榮三師に引合はされたのだが、仕事で私が誰であるか分らなかつたらしかつた。でその事を今榮三氏に話したら、「花柳はん云やはつたので踊の方のかたやと思ひました。」と云ふ。

浪花女に因んで、私はもう一度團平のことをくはしく聽いてみた。

「清水町はんは偉い三味線弾きさんでした。明治三十一年わ

てが東京ちゆうもの一度見たくてならなかつたのだす。廿七の時やつたと思ひます。東京へ行き、彦六座の頭取をしてはつた榮造はんや、小兵吉はんが神田の新聲館で人形芝居をやつてはつたんで其處へ行き、二月ばかり居るうち彦六座の大隅はんから手紙が来て、人形遣は大阪で修業せなんだらあかんと云ふことで、直ぐ大阪へ歸りました。稻荷座で丁度忠臣藏が出て、大序は直義が彌太夫、判官が組太夫、顔世が大隅太夫、若狭が伊達太夫、師直が住太夫、三味線が團平はんだした。その他に茶屋場と九段目も弾いてられましたが、老いて益々盛んなもんやと皆も驚いてました。そしたら、翌四月の芝居で大隅はんの志度寺を弾いてをられ、もうあと紙一枚ちゆうとこで撥を落され腦溢血で倒れました。(四月一日)直ぐ戸板に載せ、病院へ連れて行く途中、三休橋のところまで亡くならはりました。友松さん(現道八)松三郎さん(現新左衛門)とが一緒に従いて行かはつたのだした。

このお辻のさはりの處の「トチヅリ／＼」の三味線なぞ全く神技でしたな。」

たしかその前年の十月、團平の「布引四段目」の琵琶の音も有名なもので、松三郎(現新左衛門)が「師匠はえらい音さしはる」と云つた話も誰かに聞いたことがある。

これは津太夫さんに聽いた話で、團平は如何なる時でも左の人差指と中指とを大切に、風呂に入る時でも絶體に湯

つたので、同じ商賈人の徳義がないと云つて激怒した話。金

一清水町はんは備い一味練強きさんでした。明治三十一年わ

の人差指と中指とを大切にしてい、風呂に入る時でも絶體に湯

につけなかつたとのことだ。爪を常に堅くして居る習慣で大
事にして居た。そして藝術至上主義の人で、寝て居る間も三
味線の研究を忘れなかつたと云ふことだ。

これも文五郎さんに聞いた話だが、右手が左手に比して實
に大きく、三味線なども三月目ぐらゐに替へないと、絲が棒
にメリ込んでしまふので三味線屋が困つたと云ふ話をして呉
れた。

おちかが、門付の義大夫の三味線彈が自分も同じ義大夫の
三味線彈商賣の冥利に、一度でいい、團平師匠のテンの一撥
でいいからさし向ひで聞きたいと懇願したのを、つれなく斷

つたので、同じ商賈人の徳義がないと云つて激怒した話。金
錢に淡白で、弟子にも月謝のことを云はないので、團平獨身
の間は月末に弟子達が紙に包んだ月謝を置いてゆく。借金取
りはその包金を持つて行つて事足りたやうな無慾の話も聞い
たことがある。

文五郎さんの話によると、團平さんは洒落者で風呂に入る
時、糠袋へ白粉を入れて使ふ。黒縮緬の長羽織に宗十郎頭巾
を冠つてコツポリ下駄を履き、女形おやまのやうな態度だと云ふ話
も聞いた。

御贈答品ニハ

最モ近代的ナ花ヲ!

- 花 環・花 東・盛 花・籠 花
- 鉢 花・楠 玉・弔 燈・刈 菅
- 寶明燈・其他クリスマス・デコレーション
- 室内裝飾・テーブル裝飾

弊店ノ誇リ

最底値段ト最良品質!

慶應義塾御用

芝・三田

花 銀

電話三田四〇六三番

編輯後記

▽内村直也君の戯曲「子供」(一幕)は五十餘枚の力作である。久しく沈黙を守つた同君が、二ヶ月餘の苦吟漸くこの一作を寄せられた。阿部光子女史の小説「晩秋」は、淺尾早苗君の小説「妙福寺」と共に、何れも本誌への第二作である。詩は山中散生君と、今は軍籍にある村次郎君の二篇である。▽矢崎君の「明治文學の研究」の一端として「二葉亭四迷」、瀧井清君も「維新前後の錦繪店」の一文、「唐人往來」に就いての昆野和七君は、本誌には初めてであるが、「福澤諭吉」研究者として夙に知名で、「三田評論」編輯部員である。木下君が「郷土文化と永井荷風」について、また、児童文學再興の聲の喧しいとき古谷君が「濱田廣介と宮澤賢治」の一作を寄せられたことは意義深いことと考へる。

▽われらの同志の多くが、南北の戦線に活躍してゐることは既に

に御存知の通りであるが、「北瀟」から末松君が、「南方」から中山君が遙かに一文を送達された。中山君は藝員で、讀賣新聞文化部の矢澤君から、特に「三田文學」のためにといふので、寄せられたもので、何れも生々しい現地からの報告である。

▽巢木氏の「旅の歌」、花柳氏の人形物語、横山君の「書物挿索」、戸板君の「演劇雜記帳」である。「三田劇談會」は久保田さんが滿洲に旅行中のため休載といふことになつた。

▽「三田文學出版部」六月の新刊は、印刷製本が依然として遲滞し勝ちのため、五月に發賣の豫定であつた「自選・久保田万太郎句集」が、遅くも中旬頃までには市場に新裝を擬して發賣されるだらう。三宅三郎君の「歌舞伎劇鑑賞」は下旬になる豫定である。

▽五月二十六日、情報局と大政翼賛會との幹旋で「日本文學報國會」が結成された。われわれ

もこれに欣然參加した。從來と雖も文學者の多くが、職域報國の誠を致してゐたものではあつたが、この會の設立によつて、文學者の報國的行動は、より一層明確に決行されることと思はれる。

▽今月も發行が遅れた。編輯所の引越しも、印刷所の主任者が變更したため、思ふやうに行かなかつたのである。原稿の締切は、創作を毎月末日、その他を十日としてこれを勵行することは、既にお願ひした通りである。

▽それから、編輯所を左記に設けた。從來、便宜上銀座慶應俱樂部に置いてゐたが、俱樂部の性質上とかく不便もあるのでとリやめた。よつて、原稿及び雜誌の送先、編輯一切の事務は左記へ願ひたい。

東京市麴町區平河町二ノ十三
三田文學編輯所
和木清三郎

定價 金五拾錢 (郵税三錢)

昭和十七年五月二十日印刷 (毎月一回)
昭和十七年六月一日發行 (一日發行)
東京市芝區三田 慶應義塾内

編輯者 和木清三郎
發行者 西脇順三郎
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地
印刷者 波邊丑之助
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地
印刷所 愛宕印刷株式會社
電話二八八六、四三〇〇

東京市芝區三田慶應義塾内
發行所 三田文學會
振替口座東京三七五〇五
東京市神田淡路町二ノ九
配給元 日本出版配給株式會社

金 料 讀		
普通號一部	五十錢	二錢
半ケ年	三圓半錢	稅共
一年	分七圓	稅共

右購讀料金は一ケ年四回發行する定期特輯號料金を加算いたしましたものであります。
〇一、五月、八月、十一月號を定期特輯號といたします。
〇尙、臨時特輯號發行の場合はその都度既納購讀料より差額を申受けます。